

言語活動の充実

児童生徒の**思考力・判断力・表現力等**を確実に高めるために、各教科の指導の中で、**基礎的・基本的な知識・技能を習得させるとともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させる必要があります。**

そして、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力であり、各学校においては、国語科のみならず、すべての教科等で**言語活動を充実**することが求められています。

1 目指す児童生徒像の共有化

言語活動の充実を図った教科等の授業を実施することによって、どのような児童生徒の姿を目指すのか、校内のすべての教職員がイメージを共有することが大切です。例えば、「**自分の考えをもち、自分のことばで表現することができる子ども**」というような児童生徒の姿を設定することで、指導の目的が共通理解され、一層効果が高まります。



さらに、イメージの共有ができたなら、**担当している学年や教科等においても、指導後の児童生徒の姿を設定してみましよう。**

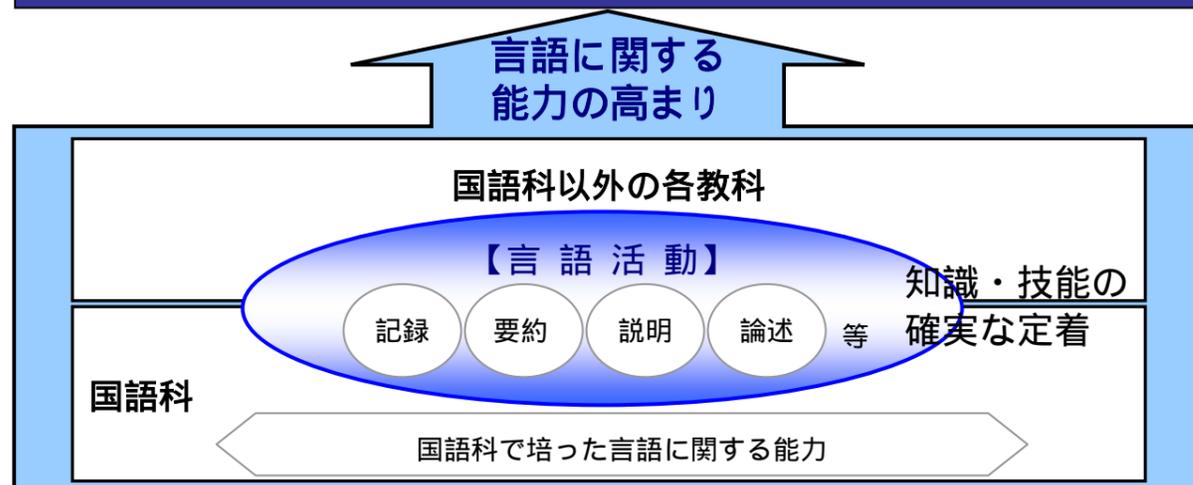
【例】

地域の特色について調べたことをもとに、自分の考えを相手に分かりやすく表現することができる。(小学校第3・4学年 社会)
リズムや速度等、感じ取ったことを根拠にして曲のよさを説明することにより、曲の特徴や演奏のよさに気付くことができる。(小学校第5・6学年 音楽)
「偶数と奇数の和はいつも奇数である」等の数の性質を、文字を用いて筋道立てて説明できる。(中学校第2学年 数学)

2 すべての教科等における思考力・判断力・表現力等の育成

言語活動の充実とは、国語科だけでなくすべての教科等で取り込まれるべきものであり、そのことによって子どもたちの言語に関する能力が高められ、**思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られます。**また、教科の知識・技能の確実な定着にも結び付きます。

思考力・判断力・表現力等の育成



【例】

美術科 第1学年 題材名「な木々を描こう」

自分の感じたことや考えたことを言葉にすることによって、考えを整理させます。さらに、意図に応じて表現させることによって技能も高まります。

このような生徒の姿が期待できます

木々を見て、自分が感じたことや考えたことを大切に、豊かに表現するために、意図に応じて様々な工夫をする。

言語活動の充実

自分の描きたい木々のイメージがもてず、見えたままを描こうとする。そのため、これまで自分が経験してきた描き方が中心となり、自ら工夫し表現の効果を高めることができない。

具体的な言語活動

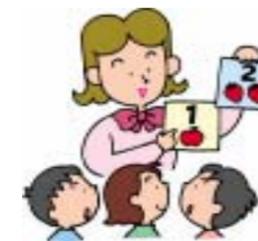
- 木々を見て「力強い」「勢いがある」など、生徒が感じたことや考えたことを発表させ、言葉にさせることで明確な表現の意識をもたせる。
- 生徒が感じた木々の力強さや勢いなどを表現するために、どのような工夫が考えられるか、形や色、材料、構図などの視点で話し合わせる。
- 話し合いで出された意見を参考にして、どのような工夫によってどのような木々を描こうとするのか、ワークシートに計画を立てさせる。



「力強さを表現するために」太い筆を使う。明度の低い色を使う。画面に大きく描く。
「勢いが感じられるように」縦長の画面構成にする。素早く引いた線で描く。などの工夫

3 指導計画への位置付け

全ての教師が、言語活動を充実することの必要性を十分に理解し、言語活動を各教科等の指導計画に位置付け、授業の構成や進め方を改善することが大切です。



これまでの指導の見直し

- 言語活動を設定するねらいは 「言語技術」を習得させることが目的となっていないですか？各教科等の目標は達成できていますか？
- 書く活動では ノートの使い方を具体的に指導していますか？
- 発表する活動では 分かりやすい発表の仕方を指導していますか？
- 話し合う活動では 話し合いのゴールを明確にもっていますか？様々な意見を出させるだけになっていませんか？

小学校理科における言語活動例

身に付けさせたい力を意図した言語活動
になっていますか？

目指す児童の姿

《思考力・判断力・表現力等の育成》

根拠に基づいて予想や仮説を立てさせることにより、論理的な考え方の育成につながります。

事実と考えを区別させることにより、思考が整理され、事実裏付けられた説得力のある表現で考えを表すことができるようになります。

複数の事実から一般化を図らせることにより、物の溶け方の規則性についての見方や考え方を明確にもつことができます。

《言語に関する能力の高まり》

一人一人が自分の考えを表現する場を設けることにより、目的や相手に応じて表現する力が身に付きます。

司会者の役割を明確に示すことにより、意図を明確にして計画的に話し合う力が身に付きます。



《知識・技能の確実な定着》

科学的な言葉や概念を使用させる指導を行うことにより、知識・技能の確実な定着につながります。

予想や仮説を立てる

根拠に基づいて予想や仮説を立てさせる

予想や仮説は単なる想像ではなく、日常生活経験や既習事項の中から根拠を導いて立てさせましょう。根拠に基づいて予想や仮説を立てさせることは、児童が「論理的な考え方」を身に付ける上で大切です。

表現の仕方つまずいている児童には、「私は～だと思います。理由は・・・」「前の学習の時～だったので、この実験の結果は・・・のようになります。」など論理を構成できるような話型を示す指導が有効です。



話す

単元「物の溶け方」における児童の学習活動例

事象と出会う

問題を見いだす

水に溶けたものの重さはどうなるだろうか。

予想や仮説を立てる



実験を行う

結果	A 食塩	B 砂糖	C ミョウバン
溶かす前の重さ	150 g	150 g	150 g
溶かした後の重さ	150 g	150 g	150 g

考察する

結論を出す

物が水に溶けても、水と物とを合わせた重さは変わらない

単元の学習を振り返らせ、レポートを作成させましょう。

理科のレポートを作成させる際には、観察・実験の結果を表やグラフ、図に整理させたり、考察を科学的な言葉や概念を使用して簡潔に表現させたりすることが大切です。

レポートを作成させた後に、そのレポートを用いて説明させる活動を位置付けることも表現力を育成する上で効果的です。

書く

考察する

科学的な言葉や概念を使用させる

既習の科学的な言葉や概念を使用して表現させましょう。

事実と考えを区別させる

文章を読み返させて、事実と考えの記述に違う色の線を引かせるなど、事実と考えを明確に区別させる指導が重要です。

表現の仕方つまずいている児童には、結論から書く、ナンバリングを使うなどの書き方のモデルを示す指導が有効です。

予想や仮説と異なる結果が出た場合は、予想や仮説及び実験方法等の妥当性について検討させましょう。



話し合う

結論を出す

自分の考えを表現する場を設ける

一人一人が自分の考えを表現する場を設けるために、小グループを活用するなど学習形態を工夫しましょう。

司会者の役割を明確に示す

一つの結論にまとめる話し合いなのか、多様な考えを交流する話し合いのかなど、話し合いの目的を司会者の役割として明確に示して話し合わせる事が大切です。



複数の事実から一般化を図らせる

結論を導く際には、既習事項や他の児童の実験結果と比較させ検討させるなど複数の事実から一般化を図らせる事が大切です。

話し合い活動がスムーズに行えるよう、時間設定をするとともに、基本的な進め方のルールを作っておく必要があります。